Research Plan for FY 2006

Koji Tanaka (CSEAS, Kyoto University)

Theme:
"30 Years Later" of Pioneer Settlers in Kabupaten Luwu Utara, South Sulawesi: Process of Their Adaptation to the Age of Decentralization

Objectives:
1) To identify changes in administrative structures at the levels of Kabupaten, Kecamatan and Desa during the last decade.
2) To identify stakeholders and beneficiaries in the development of land/resource use and management, in particular, oil-palm plantation, commercial crop cultivation, aquaculture and "forest area" management.
3) To explore the legal background of land/resource management and the settlers recognition.
4) To explore the social changes in the selected "former" pioneer settlements: ethnic interaction, leadership, and household economy.

Justification:

Dynamic changes in land use and resource management were observed in frontier regions in Kabupaten Luwu, where a number of government-supported transmigration programs were implemented and spontaneous migrants settled in 1970s and 1980s. The new settlers, both government-supported and spontaneous, exploited land and natural resources for sustaining their livelihood, while the central and local governments also implemented various regional development programs and projects in that period.

Based on my research conducted in early 1980s to early 1990s, this study tries to observe their "after" in order to understand the role of the settlers in the formation of new situations in local politics and administration after the decentralization. The study is expected to contribute to the understanding of local mechanism in which local resource is exploited, managed, and divided.

Research Sites:
Kecamatan Wotu and Malili, Kabupaten Luwu Utara.

Expected Visits to Sulawesi:
1) Fieldwork in Kabupaten Luwu Utara
Period: 30 days from late July to late August in 2006
Counterpart: UNHAS researcher (one or two)
2) Short term visit to Sulawesi
Period: 14 days, depending on the schedule for the symposium, Shimagami's project, and the Amri's and Takahashi's plans
・Attendance to Joint Symposium to be held at UNHAS/Makassar
・Fieldvisits to Sulawesi Tengah (Palu) and Sulawesi Selatan (Sinjai)

田中科研　2005 年度報告と 2006 年度計画

1　氏名・所属　　山田　勇（京都大学東南アジア研究所）
2　渡航期間　　2005 年 8 月 18 日～9 月 15 日（29 日間）
3　訪　問　先　　インドネシア、パプア
主な訪問先：マカッサル、ジャヤプラ、ワメナ、ワレレック、スンタン、メラウケ、アガツ、エチ、エウエル、ビアク、マノクワリ、マカッサル、バリ、シンガポール

4　成　　果

今回の調査は、これまで見ることのできなかったニューギニア島のインドネシア側パプアにおける天然沈香資源と、植栽の実態を知ることを目的とした。調査は、マタラム大学の Tri Mulyaningshi さんと別科研資金による赤嶺淳の三名でおこなった。

当初、入域について各種の制限を予測したが、現実には何ら問題はなく、森林局の協力のもとに調査は順調に進んだ。まず、ジャヤプラで全域のスラットジャランを確保し、先々で警察に出頭し、内域を訪れた。

山地のワメナではダニ族の集落を訪ね、一年前にはじまったという沈香木の植林を見た。村から 4km ほどの山地に共同組合が一本づつ苗木を植え、大部分がよく生長していた。

南部のエチでは、話にきいていたサゴと同じ湿地に生育する沈香木のほりあとをみることができた。上木は数年前にすべて伐採され、現在は根株以下のみが残存している。住民達は、それを見つけ、湿地の水中にもぐって根の残存部分をほり上げるという重労働を行って沈香の採取をおこなっている。

全体にパプアでは 1990 年代に沈香採取が盛んであったが、ピークはすぎさり、今や残された根株をほりおこして、それを乾かし、シンガポールへ送るという作業が一般的である。一時期には、数百軒のキオスクが村の中にでき、何百人という業者がいたというが、今は下火となっている。

帰りによったシンガポールでは、ワシントン条約に組み入れられたことによる不安が大きく、廃業を考えている業者も少なくなかった。

その対策として、Tri さんをはじめ、インドネシア各地で植栽の動きがはじまっている。Tri さんによって開発された方法はフサリウム菌をうめこんで、沈香成分を誘発する方法で、ほぼ 6 ヶ月から 2 年すれば、芳香のある成分が採取できる。パプアではまだ時間がかかるが、ロンボクではすでに成功し、沈香油をこれから抽出している。

1980 年代まではカリマンタン中心であった沈香は、その後ニューギニアにうつり、ここもはや下火となりはじめている。スラウエシは、それほど大規模に沈香採取はおこなわれていないが、まだあまり調査もおこなわれていず、今後の穴場である。

2005 年度はパプアの東半分をみることができた。2006 年度はパプアの西半分とスラウエシの一部を計画している。

5　2006 年度の計画

1）　調査期間　　2006 年 8 月 18 日～9 月 16 日（30 日間）
2）　目 的 地　　インドネシア、パプア西部一帯、スラウエシ南部、シンガポール
3）　目　　的
2005 年度にひきつづき、パプアの西半分の生態資源調査と未調査のスラウエシ南部の実態調査。シンガポールの市場調査をおこない、これまでの沈香及び生態資源調査に一区切りをつける。
4）　同 行 者　　Tri さん
5）　経　　費　　2005 年度分＋α

「インドネシア地方分権下の自然資源管理と社会経済変容：スラウェシ地域研究に向けて」2005 年度研究報告

赤嶺　淳

1　今年度の調査概要（8 月 3 日―8 月 14 日）

マカッサルでのフィールドワークと帰路に立ち寄ったシンガポールでの史料収集との 2 段構えでおこなった。

a）　8 月 4 日―8 月 10 日

チンタラウト号に乗船し、Kodingareng Lompo、Bone Tambung、Kalumpang、Barrang Lompo、Barrang Cadi、Balang Cadi、Karanrang、Salemo に上陸し、ナマコ漁の歴史、ナマコの種類、現在の漁場などについて調査した。

特筆すべき成果は、①1997 年以来、東インドネシアにおけるナマコ名にマカッサル語がかなり入っていることが気になっていたが、今回の調査でそれなりの説明がえられたこと、②オーストラリア国境地域と東カリマンタン周辺への越境操業について聞き取り調査ができたこと、の 2 点である。

b）8 月 11 日―13 日

シンガポールの公文書館で、潮州系シンガポール人で特殊海産物商をいとなむ人びとのオーラルヒストリー記録を収集した。該当史料としては潮州語によるテープが 4 人分、おさめられていることがあきらかとなった。通訳をやとい、そのうちの 1 人の口述史を英語に翻訳してもらった。

2　来年度の調査

ナマコ研究の 10 年目にあたる来年度は、とりあえずの中間報告として、これまでのまとめをおこなう予定である。今年 10 月の出版助成申請にむけて全力を投入する必要があるため、夏期休業中の海外出張はおこなわず、研究室にこもる覚悟である。

スラウェシ科研による調査としては、2007 年 2 月もしくは 3 月に、事実確認のためにマカッサルとシンガポールを 10 日間ほど訪問させていただければありがたい。

2005 年度活動報告

日本貿易振興機構アジア経済研究所
松井　和久

１．研究テーマ

スラウェシにおける地方分権化と地域資源管理に与える影響—スプルモンデ諸島をめぐるインサイダーとアウトサイダー

２．2005 年８～９月の現地調査

８月 15 日～９月 10 日に実施。ジャカルタで準備の後、８月 17 日に南スラウェシ州マカッサル市に入った。相手機関であるハサヌディン大学の関係者との議論、およびスプルモンデ諸島の大半を管轄するパンケップ県政府へのインタビューなどの後、８月 24～27 日にスプルモンデ諸島に属する９つの島にて行政官や住民から聞き取りを行った。８月 29 日には、地域開発戦略に関して南スラウェシ州政府において講演・意見交換。８月 30 日に相手機関であるハサヌディン大学チームメンバーと中間報告ワークショップを全日開催し、「島嶼部地域への地方分権化の影響：序論としてのいくつかの視点」の題で発表を行った。８月 31 日～９月２日はシンジャイ県、ゴワ県にて山間部の自然資源管理の現状を視察。９月３日にはパンケップ県水産・海洋局で聞き取り。９月５～８日にハサヌディン大学研究者と補充の議論を行い、９月９日にマカッサルからジャカルタ経由で９月 10 日朝に帰国した。

当初、パンケップ県管内の島々での聞き取りを予定したが、天候不順や船の準備不足などの理由で実施できず、その代わりに、マカッサル市管内の島々をまわり、その各々の社会経済状況や自然環境の違いが漁法や人の流れに大きな影響を与えていることがわかった。島民による自然資源管理への地方分権化の直接的な影響は明示的に現れてはいないが、行政機関の有無が援助プロジェクト受入の有無と連関して住民の開発への意識に大きな影響を与えていること、すなわちそこでは行政への依存が明らかに高まっていることが確認できた。行政機関がなく援助プロジェクトの情報もない島が自立的な態度を見せていた。

３．情報収集・その他

地方分権化に関連して、2004 年 10 月に地方行政法および中央・地方財政均衡法が改正されたほか、2005 年６月から地方首長直接選挙が開始されたため、それらの現時点での地域開発政策への影響を考察し、拙稿「地方分権化は根づき始めたのか」（アジ研ワールドトレンド 2005 年 12 月号）にまとめた。また、地方における行政と住民との関係の変化を探る基本作業として、2004 年議会選挙・大統領直接選挙を通じた政治プロセスの考察を目的とした『インドネシア総選挙と新政権の始動』（明石書店、2005 年）を他の若手研究者と一緒に出版した（本書はアジア経済研究所機動研究事業の成果でもある）。

４．2006 年度の計画

2006 年度は、2005 年度に実現できなかったパンケップ県管内の島々での聞き取りを実施したい。幸いにも、８月または９月から２年間アジア経済研究所海外研究員としてハサヌディン大学に在籍の予定であり、この機会を活用して 2006 年後半に調査を実施したい。本聞き取り調査の結果も取り込みながら、2007 年３月までに成果をまとめたい。

2005年度スラウェシ科研調査報告

長津一史

■　調査の概略

2005年9月から11月にかけて、東南アジア研究所ジャカルタ連絡事務所に滞在。この間の9月22日～26日、研究分担者の浜元氏とともに、マカッサル市、スプルモンデ諸島南部のバランロンポ島、コディンガレン島、サラッポ島、ルムルム島において、サマ（バジョ人）の海産資源利用および地理的移動に関する聞き取り調査を実施した。バランロンポ島では、ポスト・スハルト期のイスラーム実践の変遷に関する聞き取りもおこなった。また、ジャカルタ連絡事務所滞在中には、インドネシア中央統計局（ＢＰＳ）において、インドネシアのサマ人の人口分布および人口移動、社会経済状況に関する統計資料調査をおこなった。

■　スプルモンデ諸島のサマ人について

サマ人は、フィリピン・スルー諸島、マレーシア・サバ州沿岸から、スラウェシ全州の沿岸部、フローレス沿岸、ロティ島にいたる広い海域に拡散居住している。フィリピンやマレーシアではバジャウ、インドネシアではバジョという他称でも知られている。サバ州の西海岸やスルー諸島北部のバシラン島内陸に居住する稲作農耕民のサマ人を除き、大多数は沿岸・島嶼部に住んでおり、漁業、ココヤシ栽培、商業、海上交易など海と密接にかかわる生業に従事している。サマ人の一部は、20世紀半ばまで船上居住を営んでいた

これまで私は、本科研の研究分担者である言語人類学者の赤嶺氏とともに、サマ人の語彙、物質文化、起源神話、移動・移住の経緯、社会関係や海産資源利用のためのネットワーク等に関する調査をおこなってきた。その調査では、言語的相互理解性、および歴史的な移動や交流圏を念頭においた社会言語学的観点から、サマ人は大きくスルー系サマ人とスラウェシ系サマ人とにわけられることを明らかにした。東カリマンタン州のブラウ沖合から中スラウェシ州のトリトリ沖合にかけての地域をおおよその境界域として、北西に居住するのがスルー系サマ人、南東に居住するのがスルー系サマ人である。

スプルモンデ諸島には、バジョないしトリジュネ（マカッサル語で「水の民」を意味する）と呼ばれる人々が少数派として住んでいる。かれらは言語や生業形態の面でマカッサル人を主とするこの島々の先住者にかなりの程度、同化しており、それゆえサマ／バジョ人として自己定位や、他者によるサマ／バジョ人としての範疇化は、他地域に比べると明白ではなかった。インドネシアの他地域で顕著にみられる、サマ／バジョ人と他の多数派集団との社会経済的な格差、社会関係の断絶は、無いわけではないが、比較的軽微に思われた。

しかしながら、老人たちが記憶するバジョ語の語彙や、ゴワ王国との系譜的結びつきを強調する起源神話の内容などから、この地域のバジョ人が上記のスラウェシ系サマ人の一集団であることは間違いない。17世紀後半から18世紀にかけてのオランダ東インド会社の史料は、マカッサルやマナド（北スラウェシ）沖合で、船上または海辺の一時的な家屋に住みながら移動的な生活を営むバジョ人ついてたびたび報告している[Sopher 1977(1965): 300-307; Laarhoven 1990; Villiers 1990]。スプルモンデ諸島のサマ人は、17世紀に遡る早い時期にこの島々に住み始め、先住者や後に移住してきたマカッサル人などとの長期の混住・通婚の結果、後者と社会・文化的に同化したと考えられる。

今回の調査で聞いた限りスプルモンデ諸島のサマ人は、この島々を越える移住・移動の歴史をあまりはっきりと記憶していない。その移動・移住ネットワークは比較的狭い範囲

の内にとどまっている。この点でかれらは、居住地域を越える移住、移動の歴史を村落形成史とかさねあわせて語り、その移動・移住ネットワークを現在に至るまで維持・再編しているインドネシアの他地域のサマ人と大きく異なっているように思われた。ただし、1990年代以降のナマコやフカヒレ、ハタ科の魚などの中国向け海産物ブームや、バリ島を拠点とする日本向けマグロ漁業の隆盛といった近年の海産資源をめぐるマクロな経済状況の変化を背景として、サマ人の漁業操業範囲や漁業労働者としての就業範囲は広まっており、東ジャワ州沖合のサパカン島（カンゲアン島嶼群）やバリ島北部、フローレス北岸などのサマ人の居住地を結ぶ社会ネットワークが新たに形成されているようであった。

■　インドネシアのサマ人の分布と人口

インドネシアのサマ人の人口と分布については、これまで信頼しうるデータが存在しなかった。2000年に中央統計局が実施したインドネシア人口センサスでは、独立後はじめてとなる悉皆調査による民族別人口データが示された。今回のインドネシア中央統計局での調査では、上記センサスのオリジナル・データをもとにサマ人の人口とその分布を明らかにすることができた。調査によれば、2000年のインドネシアのサマ人の人口は、約19万であった。マレーシアおよびフィリピンの同年のセンサスによるサマ人の人口は、それぞれ約35万人、約56万人である。つまり東南アジア島嶼部全体でのサマ人の人口は、約110万ということになる。サマ人の移動とネットワークに関する考察などを念頭においた分析結果はいずれ公表していくつもりである。さしあたってここでは、インドネシアのサマ人の州別人口の表と東南アジア島嶼部におけるサマ人の人口分布図を示しておきたい（資料１、資料２）。

参照文献

Laarhoven, Ruurdje. 1990. Lords of the Great River: The Magindanao Port and Polity during the 17th Century. In *The Southeast Asian Port and Polity, Rise and Demise*, edited by J. Kathirithamby-Wells and John Villers, pp. 161-185. Singapore: Singapore University Press.

Sopher, David E. 1977(1965). *The Sea Nomads: A Study of the Maritime Boat People of Southeast Asia*. Singapore: National Museum of Singapore. (reprinted in 1977 with postscript)

Villiers, John. 1990. Makassar: The Rise and Fall of an East Indonesian Maritime Trading State, 1512-1669. In *The Southeast Asian Port and Polity, Rise and Demise*, edited by J. Kathirithamby-Wells and J. Villers, pp. 141-159. Singapore: Singapore University Press.

2006年度スラウェシ科研調査計画

2006年7-8月（30日）および12月（10日間）

北スラウェシ州マナド沖合ないしゴロンタロ州パフワト県において、サマ人のトミニ湾ーマカッサル海峡域の移動・移住ネットワークの実態と変遷に関する調査を実施する。特に着目したいのは、1990年代以降の中国向け海産物ブームならびに地方分権化を契機とする操業形態や漁場の範囲、海産資源へのアクセス権、海産物流通ルート等の再編である。時間が許せば、浜元さん・遅沢さんのスプルモンデ諸島調査にも同行したい。この調査と従来の調査結果をふまえて、スラウェシ島を取り囲む環スラウェシ海域（？）におけるサマ人の移動の社会史をまとめていきたい。

JULY to AUGUST 2006 TRIP (AZIZ SALAM)

19 ~ 21 July 2005. Data Collection on Boats of Spermonde.

Pelayaran ini adalah pelayaran riset bertujuan untuk mengumpulkan data tentang keadaan umum beberapa pulau di Kepulauan Spermonde dan juga data ukuran lima jenis kapal yang banyak digunakan oleh penduduk, nelayan dan pedagang. Pesertanya terdiri dari 12 orang, mahasiswa, sarjana, dan dosen

Tim pengukur kapal diturunkan secara berpasangan di pulau-pulau. Pada saat mengunjungi sebuah pulau dibutuhkan bantuan jolloro setempat. Jolloro yg membantu mengangkut dari kapal ke darat dan sebaliknya biasanya diberi imbalan Rp.20.000,-. Laporan Keuangan sudah saya berikan kepada Ibu Ija di PSL UNHAS. Hasilnya adalah data ukuran 100 buah kapal nelayan, dan pengangkutan (manusia dan barang) serta data profil umum pulau-pulau. Sailing Routes: 19 Juli 2005:Paotere – Barrang Lompo – Barrang Caddi – Langkai. 20 Juli 2005: Langkai – Balang Lompo – Samatellu Lompo – Sabutung. 21 Juli 2005: Sabutung – Kulambing – Laiya – Paotere

30 July ~ 1 August 2005. Coral Reef Survey of Spermonde

Ikut team-nya Ibu Dewi Yanuarita mengunjungi pulau-pulau: Barrang Lompo, Langkai, Sarappo Keke, Sarappo Lompo. Participants: anggota team Ibu Dewi termasuk Muhammad Neil, Ivan, dll. Dr. Katsuya Osozawa, Aziz Salam, Askar, Wahyudi. Melihat dengan mata kepala sendiri (snorkling) kerusakan karang akibat bom dan bius.

3 ~ 8 Agustus 2005. Vegetation Survey of Spermonde Isalnds

Survey vegetasi di pulau-pulau. Barranglompo, Kodingareng, Kodingareng Keke, Bone Tambung, Pulo Badi, Balang Caddi, Salemo. Melakukan pencatatan jenis-jenis vegetasi yang tumbuh di pulau-pulau dan membuat beberapa plot gambar penampang vegetasi. Participants:Dr. Katsuya OSOZAWA,Dr. Jun AKAMINE, Yoshifumi FUJITA, HONDA, Wahyudi, Askar, Aziz Salam.

8 ~ 11 August 2005. Cinta Laut Eco-tour (Spermonde).

Berkeliling pulau-pulau spermonde untuk memperkenalkan kepada anakmuda keadaan lingkungan laut dan pulau serta memperlihatkan kegiatan-kegiatan nelayan. Participants: Dr. Kei MIZUNO, Maruku MIZUNO (5 th), Dr. Katsuya OSOZAWA, Dr.ICHIKAWA, Aziz Salam, Askar, Wahyudi, Yoshifumi FUJITA, Yutaka OSOZAWA, Yasushi OSOZAWA, Willem Moka,Wilma Moka, Diana Moka, Ivan.

Islands of call: Salemo, Sagara, Gs.Toraja, Kulambing, Samatellu, Gondongbali, Papandangan, Kapoposang, Sanane, Paotere (Mks)

DECEMBER 2005 to JANUARY 2006 TRIP

5-10 Dec. I went to Pangkajene trying to get research permit from local government but they suggest me to go to Governor Office first, then I went to Salemo to obtain some data on history of fishery. 11-14 Dec. With Dr.Osozawa, Dr. Momose, Dr.Hamamoto and others, we went to islands of Spermonde (Podang-Podang isl.) aboard the Cinta Laut vessel.

15 and 16 of Dec. Join Dr.Osozawa and Dr.Momose to visit State University of Gorontalo. 17-21 Dec. Aboard Cinta Laut with Dr.Osozawa, Dr.Hamamoto and others to islands of Spermonde (Karanrang, Balang Lompo and Balang Caddi isls.).

22-30 Dec. Makassar: Gov. office, purchashing research permit. visit UNHAS and meet some univ. staff, CSEAS Field Sta. borrow some books. 31 Dec-8Jan. Salemo, Pangkajene and Bungoro, collecting data and research permit. 11-24 January 2006. I went to parts of East and South Kalimantan with Dr. Ichikawa to visit Balikpapan (we went upriver to Sepaku), Samarinda (Mulawarman University), Bontang (Tanjung Sea Port and Lhoktuan), Sangata (three ship ports along Sangata River: Kampung Kajang, Pelabuhan H. Bollo, Gang Durian), Bengalon, Sangkuliran (upriver to Pengadan). We interviews people on the history of natural resources utilization including the ironwood and also sailors of South and West Sulawesi about their sailing and trading of ironwood activities. 25-27 Jan. I stayed in Makassar, borrowed and copied some books from the CSEAS Field Station.

ブギス人の林産物交易からみたスラウェシとカリマンタンのつながり
－カリマンタンの林産物利用を通じて－

市川昌広（総合地球環境学研究所）

１．　2005 年度におこなったこと・わかったこと

今年度は、2005 年 8 月と 2006 年 1 月の 2 回、計 1 か月程度の現地調査をおこなった。8 月にはスプルモンデ諸島を調査船チンタラウト号によってめぐり、ボルネオ鉄木(以下、鉄木)の流通について聞いて回った。鉄木は、近年、スラウェシで水上や湿地に家を建てる際の支柱として使われている。名のとおり、非常に硬く、腐りにくいからである。しかし、やはり名が示すとおり、ボルネオ(カリマンタン)には生育するが、スラウェシではみられないから、カリマンタンから運んでくる必要がある。南スラウェシでは、スプルモンデ諸島のトレーダーたちがその流通を担っている。

[島によって異なる交易パターン]

多くの島々が散らばるスプルモンデ諸島でも、トレーダーのいる島はいくつかに限られる。サブトゥン、ライヤ、クランビン、サレモなどである。それらは、互いに隣接しているのであるが、今日、それらすべてが同程度の活発さで鉄木を扱っているわけではない。20、30 年前は盛んであったが、近年では衰退している島。逆に、近年になって交易が活発になってきた島がある。今日の様子をみても、島により交易ルートや鉄木以外の交易品が異なったりする。これまで経てきた、島々を取り巻くときどきの社会的、経済的環境の影響によって、差異が出てくるようだ。それらについては、一緒に現地を歩いたアジスさんが詳しくまとめている。

スプルモンデの島々を訪ねているうちに、カリマンタンのどこら辺りから鉄木が積み出されているのかが次第に明らかになってきた。そこで、次に、鉄木の供給元の様子をみてみることにした。

[ブギス人からの影響を強く受けた先住民の林産物利用]

2006 年 1 月は、鉄木の供給元である東カリマンタンの村や町をアジスさんとともに訪ねた。昨年 8 月の調査の際にスプルモンデの人々との話のなかに出てきた、サンクリラン、サンガタ、ボンタン、サマリンダ、バリックパパン、タンジュンアル、バトゥリチンなどの港を中心に見てきた。多くの港でスラウェシ本島からの船に混じってスプルモンデからの船も見られた。鉄木を待ってすでに２，３ヶ月停泊している船もある。雨季で伐出道がスリップしやすく、搬出が滞っているからだ。

聞き取りから、鉄木の交易は 30、40 年前ごろから盛んになり、当時は、バトゥリチン、タンジュンアル、バリックパパンなど東カリマンタン沿岸の南に位置する港からの搬出が盛んであった。しかし、ここ 10、20 年は、資源の枯渇のため、徐々に伐採と搬出地が北側に移ってきている。現在、盛んなのはサンガタ、サンクリランである。

サンガタに近いブンガロンの古老から、ブギス人の到来と林産物採集・交易の話を聞い

た。元はクタイ人だけの村であったところに、50 年ほど前からブギス人が住み着くようになった。彼らの動きがその後、林産物の採取や流通を活発化させた大きな一要因になったようだ。たとえば、鉄木では、70 年代に商業伐採会社が入り、伐採道路がつくと、その周辺の鉄木の伐採をブギス人が中心となり、クタイ人を巻き込んでおこなうようになった。チェンソーを持ち込み、鉄木を牽引し搬出するための水牛はスラウェシから運んできたという。ちょうど鉄木の需要がスラウェシで増えだし、東カリマンタンの南のほうでの鉄木の枯渇の時期と重なるようだ。

このように、スラウェシにとくに近い東カリマンタンの林産物利用は、ブギス人の動向に強く影響を受けながらみられるというのがひとつの特徴であるといえるのではなかろうか。

沿岸部ばかりでなく、昨年度に調査したマハカム川の中流域でも、今日では、先住民ダヤックのほとんどの村にブギス人が住み着いており、彼らが中心となり木材、ツバメの巣などの林産物は交易されている。おそらく、ダヤックの林産物採集もブギス人の動向が影響しておこなわれてきたのであろう。

２．　来年度おこないたい調査

上で述べたように、これまでの 2 年間の調査から、東カリマンタンの先住民の林産物利用は、相当、ブギス人の林産物採集あるいは交易に大きく影響を受けてみられる様子が明らかになってきた。ブギス人側からみれば、カリマンタンの林産物や先住民のあり方が、彼らの行動に影響を与えてきたといえる。来年度は、引き続き、カリマンタンのフィールドでみられる鉄木など林産物の利用を通じて、ブギス人がそれに与えた影響をより詳しく調べたい。この私の研究と、アジスさんのブギス人による鉄木交易、遅沢さんのスラウェシ本島での鉄木流通の研究を通じ、カリマンタンースラウェシ間にみられるひとつのつながりが浮かび上がってくるだろう。

来年度は、東カリマンタンの２，３の村に調査地を絞って、そこでの鉄木を含めた林産物の採集、交易の現況および歴史的変遷とブギス人との関係を、これまでより深く、細かく聞き取る。訪れる村は、鉄木の伐採がまだ盛んな沿岸部のブンガロン村(クタイ人＋ブギス人)とマハカム川中流域のダヤック人の村に加え、時間が許せばもう一村、トランスミグラシ村を考えている。

調査期間は、計 1 か月程度、今のところ 7 月を予定している。

スラウェシ科研：最終年度の調査計画と平成 17 年度の活動

濵元聡子（教務補佐員・京都大学東南アジア研究所）

■最終年度の調査計画

（スラウェシ科研から）：2006 年 8 月中旬～10 月中旬までの 2 ヶ月間

（若手研究から）　　：2006 年 12 月～2007 年 1 月までの 2 ヶ月間

行き先：　南スラウェシ州スプルモンデ諸島南部地域／西スラウェシ州ティナンブン郡／東カリマンタン州バリクパパン

□調査の内容：スラウェシ科研では、自然資源利用・管理の視点から、島嶼部郡の新郡設立をめぐる動態を理解する

若手研究では、学校教育の現場での地方分権の進行状況と、若い世代が主導する<地域の目覚め>についての参与観察をおこなう。

■出張

出張期間

1 回目：2005 年 8 月 20 日～9 月 30 日（スラウェシ科研）　：スプルモンデ諸島

3 回目：2006 年 3 月 6 日～3 月 20 日　（スラウェシ科研）　：スプルモンデ諸島（事務処理中心）

---

2 回目：2005 年 12 月 8 日～2006 年 1 月 27 日（若手研究（B））：スプルモンデ諸島、西スラウェシ州、シンジャイ県

■調査報告

□第 1 回目の調査：

第一回目の調査の目的は、1996 年以来、継続しているスプルモンデ諸島ウジュンタナ郡島嶼部における定点観測をおこなうことと、スプルモンデ諸島南部地域の概況を観察することであった。定点観測では、主要な調査地であるバランロンポ島、バランチャディ島、コディンガレン島、ルムルム島、バディ島、ランジュカン島、ランカイ島を回った。8 月下旬に松井和久氏、9 月中旬に長津一史氏と、合計 2 回にわたり、これらの島を訪れた。2004 年の後半から、この地域では、島嶼部だけで構成された新しい郡を作る計画が、急浮上している。これを、誰が実際に推進しているかという状況をみると、島嶼部出身かつ高等教育を受けた若い世代ということが見て取れた。若いリーダーと、島の年配層や教育を受けていない若い世代との関係を見ると、まだ十分なネットワークや関係は形成されておらず、しっかりと方向性を理解してもらっての新郡設立の動きとは言い難い状況であった。それにもかかわらず、若い世代が、既存の政治家と公務員等々との関係に頼らず、独自に遠隔の島嶼部の厳しい経済状況と生活環境を直接、マカッサル市長に訴えるなどして、さまざまな経済援助のプログラムがもたらされている。基本的には、十分な漁具や漁船を持たない漁民に対する資金援助と、島嶼部内集落において、小規模商業を営む住民への低額融資が中心となっている。これに関して、若者世代は、1990 年代半ばに施行された IDT 政策の轍を踏まないよう、融資を受けた人に対する「観察」をおこなっているとのことであった。

しかしながら、積極的に島民をまとめていく若い世代がいない島も、やはりある。ウジュンタナ郡の中では、今のところ、そのことによる新郡設立の温度差は目立たないものの、今後、おおきな問題になるだろうとの認識は、若者世代の中にすでにある。このような概況が観察できること

がすなわち、10 年前の IDT の時とは異なるように見えた。
自然資源利用の点では、少なくとも過去 5 年間において、もっとも大きく変化したのは、ダイナマイト漁と漁毒漁が激減したことである。かつて、これらの漁法でおおきな利益を得たボス（プンガワ）たちは、海洋巡回や罰金刑などを厳しくおこなうようになった警察や海軍、海洋漁業省との癒着関係は失われたと、現状を認識していた。その結果、寄港先での海産物の買い付けを中心に据えた商業船操業への転換や、ナマコ漁への転換が顕著であった。この行き先としては、西スラウェシ州島嶼部アンボ島近海、東カリマンタン州バリクパパンおよび同州沿岸部と、西パプア州都ソロンに特化している。ナマコ漁への「転換」と書いたが、果たしてそれは正しい記述かどうかが気にかかっている。この 10 年の中で見ると、ナマコ漁はハタ漁全盛期もダイナマイト漁全盛期にも、かならず表舞台の活動の裏側でおこなわれてきたものである。過去二年ほどに絞ってみると、ナマコ買い付けに参入した女性が目に付く。一家の主婦が、ある程度まとまった資金を元に、ジャカルタやシンガポールの華人商人と、日々、相場を連絡試合ながら、出荷量や出荷先を決定している。この資金源の一部が、先にふれた島嶼部住民への低額融資であった。
上で述べたように、周辺の地方政治の行為主体が若者世代に移行したことや、生業環境の変化の中で、バランロンポ島の生活世界がなにを経験したのかを見てきた。確かに地方分権の進行は地方行政による自然資源管理を、より実質的なものに位置づけたように見える。しかし、自然資源管理あるいは自然資源利用は、本来的にはそれが独立して存在するものではない。気候や海流あるいは水温などの自然環境的な要素や、そのときの政治経済的状況を伺いながら、弾力的に（あるいは状況主義的に）その都度、形を変えて続いてきたのではないか。少なくとも、海の自然資源管理あるいは利用は、そのような社会環境に連動してさまざまに内容が変遷してきたのではないかと推量される点において、陸上の自然資源管理とは異なるようにみえる。陸上の自然資源管理が、どのように確立されてきたのか、住民によって維持されてきたのかがわかれば、両者の比較検討ができるように思われた。

□第 2 回目の調査：
チンタラウト号を使い、スプルモンデ諸島のうちパンカジェネおよび島嶼部県（以下、パンケップ県）リウカン・トパビリン郡の島を訪れた。遅沢の意向で、ポダンポダン・ロンポ島を中心とした臨地調査と、バランロンポ（Balang Lompo）島とバランチャディ（Balang Ca’di）島を中心とした臨地調査を、二回に分けておこなった。2 回をとおして、島の儀礼活動や宗教活動、および歴史についての聞き取りを、おこなった。時間的な制約があり、十分な聞き取りはできていないが、ウジュンタナ郡島嶼部ではみられない独自の儀礼チェラ・リウカンについての興味深い聞き取りができた。これは、ウジュンタナ郡全域で確認されたポッポとパラカンという狐憑きあるいは犬神に似たものをめぐる言説とひじょうに似通うものであった。つまり、特定の家系にのみ受け継がれてきた特別な能力ということである。ポッポとパラカンが、その能力を忌み畏れられ、共同体から排除される存在であるのに対し、チェラ・リウカン儀礼の継承者たちは、忌み畏れられつつも、共同体の安寧秩序を祈願する独自の儀礼をおこなう集団として、一定の距離を置かれつつも受け入れられている。共同体との関係においては、方向性が異なる者の、ひとつの小さな狭い世界を形成する島が、共同体として分裂することもなく、また島を追い払われたり、まとまった集団が自発的に出て行くことなく続いてきたその根底に流れるものがあるようにみえた。他の島ではどうなっているのか。最終年度の調査で、こういったデータがどれだけ採集できるかわからないが、わたし自身が関心を持ち続けてきた＜しま世界＞あるいは＜海の地域＞という閉鎖的に見えつつも、その境界が自由に伸縮するように見える地域社会を説明する手がかりを得られ

るようにも思う。

□その他：

第1回目の調査から帰国した翌日、インドネシアでは全国的に石油燃料価格が80%値上げされた。実際の市場価格では、数値以上の値上げを見せたという。この後、第2回目の調査までの期間に、島嶼部ではどのような変化があっただろうか。バランロンポ（Barrang Lompo）島では、石油・ガソリン等々石油製品価格の上昇が、雨季による天候不順に相まって、出漁休止が余儀なくされた。一回の出漁にかかるコストが、漁獲に見合わないケースが相次いだ結果、船主など、比較的蓄えに余裕のある漁民は、「休暇」を取り、それ以外の船子たちは、東カリマンタンやソロンなどに出稼ぎに向かった。時期的には、断食月が挟まったため、休漁に関する説明はつく。一方で、レバランのための新しい衣類や料理の準備にかけるコストは、激減していた。漁撈活動に従事せず、島内での小規模商業などに従事している人々は、この間、ひとつの投機的試みをおこなった。二輪バイクの後部に屋根付きの車を購入し、島内で荷物および人運搬の手段として走らせたのである。道幅 2.5 メートル前後しかない島内の道を、マカッサル市内を走る乗り合いミニバス（ペテペテ）並みに走る。第一号車は、マカッサル市内のパサール・テロンで蔬菜類・穀類・食用油脂その他豆腐・テンペなどの加工食品を毎日、仕入れては、庭先に設えた小屋掛け店舗で販売する「パテロン」と呼ばれる女性であった。3日後に、夫が東カリマンタンへ出稼ぎ中の20代後半の女性が、二号車を即金で購入した。いずれも、マカッサルの代理店経由で、ジャカルタから取り寄せたが、購入価格は現金払いで13ジュタルピア（約16万円強）であった。一回の乗車賃は大人 1,000 ルピア、こども 500 ルピア。運転手は売り上げからコストを差し引いてから、15%を賃金として得る。第一号車の運転手は、最初の1週間で70万ルピアを得て、携帯電話を購入した。このバイクバスは、その商品名からカイサルと呼ばれたが、やがてはオジェックに落ち着いた。私が第2回目の調査で島に入ったのが、第1号車の登場から10日後のことであった。12月23日に島に入ってから1月24日に島を引き上げるまでの間に、合計17台のオジェックが島に持ち込まれた。うち2台は、廃車処分となったホンモノのペテペテである。過当競争になり、毎日車を走らせない所有者も出始めた。なにより、休漁中の世帯では、日に何度も車に乗りたがるこどもを厳しく叱るようになった。さらには、一種の交通渋滞を起こし始めた。このため、ついには島民全体集会が開かれ、将来的に台数が減ることもあるかもしれないが、交通規則を作ろうということになった。運転手はかならず免許を合法的に得ていること、車は北回り一方通行で、沿岸部の外周道以外を通行しない、夜間は点灯すること、定員を超える乗客を溢れるほどに乗せないこと、などが住民主導によって決定された。この場には、村役場および村長などは、一切、中心的な役割を負っていない。

このあたりの一連の状況を見てみると、島全体がレンタル VCD 屋を開いた 1990 年代終わり、隣近所の女性が競い合って衣類掛け売りを始めた 1990 年代半ば、プレイステーションのゲームセンターが登場した 2000 年代初頭のころに似たムードがある。いずれは過当競争となることが予測されるのだが、誰もが飛びつく。この時代の漁業状況がどうであったのか、自然資源利用がどうであったのかを比較検討していくことで、スプルモンデ諸島における傾向がみえてくるかもしれない。

今回の調査では、個別の情報を得るところまでしか到達できなかった。最終年度では、もう少し、歴史的な位置から俯瞰したときの、現在の自然資源利用の位置づけができるような調査をおこないたい。